山口新聞　2007年（平成19年）1月8日　第三種郵便物認可

歴史遺産に学ぶ

リレーエッセー

サビエル生誕500年

藤屋　侃士
元山口放送取締役

1月8日は私の誕生日、67回目の誕生日 2007.1.8に山口新聞に掲載された「サビエル生誕500年」を番外編としてホームページに載せることにした。

ユーラシア大陸の最西端、ポルトガルのロカ岬。首都リスボンから車で四十分余り、ロカ岬に立ったのは去年の暮れのことである。

岬には、ポルトガルの詩人カモンエスの「ここに地果て、海始まる」と書かれた大きな十字架の石碑が立っていた。前方に広がる北大西洋に夕日が沈むのを見ながら、日本に若さで亡くなった。この間、一度も祖国スペインに帰ることはなかった。

サビエルが生まれたのは一五〇六年。昨年は生誕五百年の節目の年、それを記念して昨春サビエル城など北スペインを中心に巡礼した。

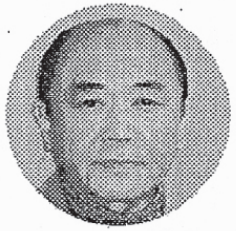
今、地元の新聞「日刊新周南」に毎週木曜に巡礼記を書かせてもらっている。肉付けするため、昨年八月にサビエルの上腕が安置されているマカオに、年末には冒頭のポルトガル、南スペインを旅した。

国土回復運動

年末の旅で、何度も耳にした言葉「レコンキスタ」（国土回復運動）。

イスラム勢力が、北アフリカからジブラルタル海峡を渡り、リベリア半島に侵入して来たのは七一一年。それからわずか三年で、北の一部を除いてイスラム圏になった。

これに対して、カトリック勢力が起こした運動がレコンキスタである。そして七百八十年後の一四九二年、イスラム勢力は最後の拠点グラナダのアルハンブラ宮殿を明け渡し、現在のカトリック国スペインが形作られていく。



ポルトガルの方はそれより二百年早くレコンキスタは終わっている。今も、イスラム時代の塔（ミナレット）が教会の鐘の塔として残っていたり、イスラム文化の「タイル」がポルトガルの名物になっている。

歴史的視点で

リベリア半島に限らず、ヨーロッパは石造りである。今もたくさんの歴史的建造物が残され使用されているため、自然に自分が歴史の積み重ねの上に生きていることを自覚する。

そして、歴史的視点から自分を見ると、いかに微々たる存在であり、一人ではなく、他者と共生している自分に気付く。神の存在を実感するのも、歴史的視点に立った時のことが多い。サビエルの足跡を訪ね、改めて彼が聖なる人であり、彼により神の存在を実感させられたのである。

今、他者との共生に無関心で、利己的生き方が目立つ。自分のことしか考えない心の貧しさが、いじめなどの社会現象として現れているのではないだろうか。

人が本当の人間になるのは、他者に心を開き、己が存在の小さを自覚する時。この一年、巡礼で得たものを少しでも成長させたいと思うのである。

◇

ふじや・かんじ　旧満州奉天に生まれ、敗戦とともに山口市に引き揚げる。山口高卒、日本大学芸術学部放送学科卒。昭和37年山口放送にアナウンサーとして入社。その後ラジオ番組制作に携わり、「オムツが結んだパレスチナと日本」「祈りの人たち・15人のカルメリット」「少子化時代のサイレント・ベビー」などで日本民間放送連盟賞受賞。一昨年退任。下松市河内。67歳。

次回は藤屋さんの紹介で、サビエル家の末孫で周南市の徳山カトリック教会神父、泉類治さんが担当します。